

植民経験をめぐる歴史認識に関する基礎的研究

—外地としての樺太・北海道—

山口 睦（山口大学人文学部）

1. はじめに

本論は、インタビュー調査、現地調査を通して北海道のある一家の樺太移住の経験、その記憶の継承について明らかにするものである。20 世紀の日本社会におけるミクロな民衆の植民地経験の記録や記憶の理解が、現在国際的な問題となっているロシアとの領土問題の理解の一助となると考える。

本論の対象である樺太とは、地理的に北海道稚内市から宗谷海峡を隔てて位置するサハリン島の北緯 50 度線以南を、時代的には 1905 年から 1945 年の日本統治時代を指す（図 1 参照）。近代日本国家が形成される中で、北の国境線を接していたロシアと 1855 年日露通好条約、1867 年樺太仮規則調印、1875 年樺太・千島交換条約などを経て、1905 年日露戦争講和条約によってサハリン島の北緯 50 度以南が日本領「樺太」となることが決まった。1907 年に樺太庁が発足し、植民地行政が敷かれた。その後、1942 年に樺太庁が内務省に移管され、樺太は翌年に内地¹編入を果たした。1945 年 8 月 15 日に内地では終戦を迎えるが、樺太ではそれより前の 8 月 9 日にソ連が日ソ中立条約を破棄して侵入、戦闘を開始した。続いて 9 月にかけて千島、択捉、国後、色丹、歯舞に上陸し、占領し現在に至っている。

樺太の植民地としての特徴は、地理的に日本（北海道）から近いこと、日本人移住者が多く、経済制度や統治法制的に「内地化」が進み、北海道との強い地域的一体性を有していたことである。1945 年時点で総人口約 40 万人の 95% 前後を日本人が占めていた。植民地研究によれば、植民地には移住型植民地と投資型植民地があり、樺太の場合は前者に当てはまり、それがゆえに「植民地」としての研究が朝鮮、台湾、満洲などに比べて 20 世紀を通してあまり進んでこなかった（竹野 2008）。竹野が指摘するように、移住型植民地に分類される樺太研究においては日本人移住者自体の分析が不足しており、移住日本人の経済活動、生活、文化を明らかにする必要がある。さらに、隣接する「内国植民地」北海道との関係性を問い直す必要がある。本研究は、これらの指摘に対してある一家を事例として北海道から樺太への移住、そして北海道への引揚げとい

¹ 1889 年の「大日本帝国憲法」公布時点で日本領であったところを「内地」、「外地」とはその後に領土編入したところをさす（三木 2006：3-4）。三木によれば日清戦争以降に植民地を獲得した日本は、「植民地」という用語がもつ侵略的響きを嫌い外地と呼ぶことでカモフラージュしていたという（三木 2006：44）。

う行程を描き出すことにより移住日本人の生活や文化、そして当時の北海道と樺太との関係性の一端を明らかにできると考える。

2. サハリン島概況と植民地樺太形成の流れ

北海道の最北端である宗谷岬から 43km 隔てたところにサハリン島の最南端の西能登呂岬（クリリオン岬）がある。春以降、暖かくなると海からの水蒸気によって島の姿は見えなくなる（写真 1 参照）。

現在のサハリン島は面積 8.7 万km²、人口 48.8 万人（2015 年）、州都はユジノサハリンスク（旧豊原）である。気候は亜寒帯に属し、平均気温は 1 月はマイナス 14 度、8 月は 16 度であり年間降水量は 800～900 ミリである。フランスとほぼ同緯度にあるが、シベリア大陸からの季節風やオホーツク海の寒流の影響を受けるため寒冷である²。

樺太時代の人口は、1907 年の約 2 万人から 1941 年には 40 万人まで増加した（図 2 参照）。1945 年には総数 382,713 人、日本帝国臣民 382,069 人（内地人 358,568 人、朝鮮人 23,498 人、台湾人 3 人）、先住民族 406 人、外国人 238 人となっている（中山 2014：64-65）。

領有開始当初の最大の産業は漁業であり、主要漁獲物はニシン、サケ、マス、カニ、昆布などであった。当時は全面積の 9 割が針葉樹林（主にトドマツ、エゾマツ）に覆われており、その豊富な森林資源によって 1910 年代後半から 1930 年代後半までパルプ・製紙業、建材などが総生産額の 8 割を占めていた。サハリン島は山がちであり、少ない平野も農耕には向かない酸性土壌、ツンドラ地帯が主だった。平野の土地を改良し雪解けの 4 月下旬から雪が降る 10 月の前までの限られた期間に燕麦、雑穀、豆、馬鈴薯などを栽培



写真 1. 宗谷岬にある「日本最北端の地の碑」（2023.6.17 撮影）



図 1. 樺太関係図（日本領有時代）

² 北海道宗谷総合振興局 HP「サハリン交流：サハリンの風土・歴史」参照
(<https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/p01/index.html>、最終閲覧 2024.12.26)。

していた（原・天野 2017：15-22）。その後、1910 年代以降、製紙業、炭鉱開発が進んだ。現在の主産業は石油ガス、石炭、水産業、電力産業である。

樺太と内地間の交通は船舶に依っており、1923 年に稚内と大泊間に稚泊航路が開設された。当時の営業キロ数は 210 km、所用時間は 8 時間、定員 754 名の砕氷貨物船が毎日 1 便往復していた。他にも、大阪―大泊―敷香、大阪―大泊―恵須取の大阪線、伏木発の伏木線、北日本汽船による小樽―真岡―野田―泊居―恵須取といった航路があった（原・天野 2017：23）。樺太内の交通は鉄道が担っており、1906 年開設の大泊―豊原間の軽便鉄道から始まる。1911 年には大泊―栄浜間の樺太庁鉄道泊栄線が全通、落合から北は民営の樺太鉄道が 1936 年に敷香まで通った（原・天野 2017：23-24）。

樺太の植民地化は次のように進められた。1905 年 8 月に樺太全島を占領した日本軍が島内に軍政を施行、樺太民政署を設置した（三木 2006：39-41）。その後、同年 9 月ポーツマス講和会議においてサハリン島南部の領有が決定し、本署をコルサコフ（大泊）、支署をウラジミロフカ（豊原）にした。1907 年 3 月に日本政府が樺太庁管制を公布、

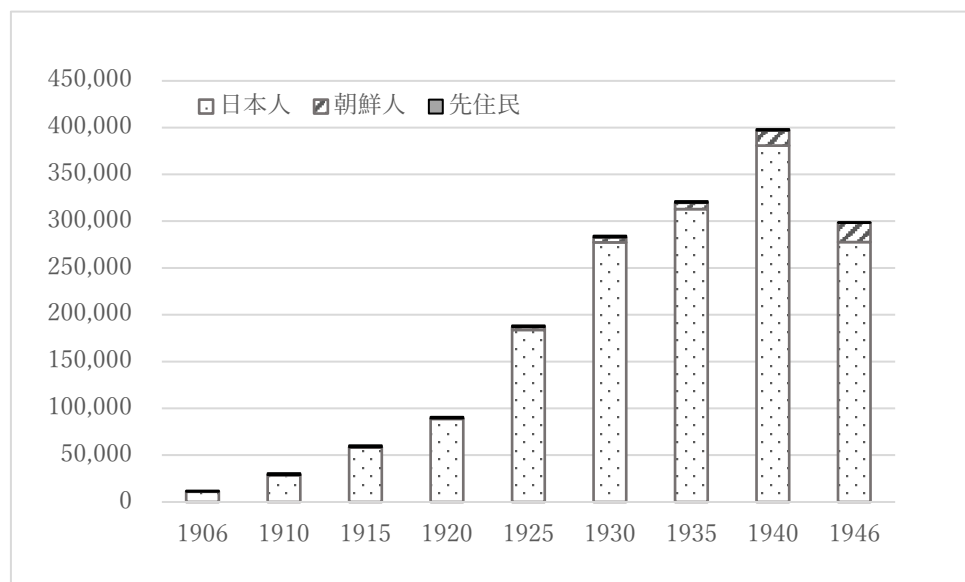


図 2. 樺太の人口（〔田村 2014〕より作成）

樺太庁を設置し、日本の植民地とした。樺太は戦火によって被害にあった集落が少ないため、ウラジミロフカではロシア人の残した家屋を改良して、移住した日本人が利用しながら市街地建設に邁進した。

三木によれば、北海道の移民政策は①開拓使時代、②三県一局時代、③北海道庁時代、④許可移民時代に区分される³。③④においては樺太への移民事業と重なっており、北

³ 北海道開拓使は国防上からも急務とされた開拓のため国家主導型の保護移民制度を採用した。1869 年「移民扶助規則」を定め、募移農夫、自移農夫、募移工商、自移工商の四種

海道を經由して移住する者が多かった（三木 2006：66-67）。三木は、当時の樺太の特殊性について次のように指摘した。

樺太は外地のなかで最も内地的な場所で、逆に北海道は沖縄とともに内国植民地とよばれるように植民地性の色濃い場所であった。そして、両者はかつて蝦夷地という共通の枠組みに属し、現在は両者間を日・ロのバウンダリーが画している。実はこうした複雑な絡み合いを周辺地域との間に有している日本の植民地は樺太くらいではないだろうか（三木 2006：54）。

移住者は本州において養蚕・炭焼きなどを含む広義の農業従事者で、学歴は尋常小学校卒業や中退者が主であった。本州において土地を持たず北海道へ移住する者は浮浪人視されており、さらに北海道においても条件のよい割当植民地がきれると樺太へと玉突き状に移住する、という様態がみられた。

樺太の農業移民について研究している竹野によれば、樺太では領有直後から 1940 年まで自由移民（1907-1925）、指定移民（1927-28）、集団移民（1928-）制度が取られていた（竹野 2000）。20 世紀に入り内地における人口が増加しアメリカや南米への移民が禁止されたため、1920 年代後半以降、樺太は移民先としてその重要性が認識されていた。

3. 恵須取^{えすとる}町概況と A 家概要

3. 1 恵須取町概況とソ連軍侵攻

本論で取り上げる A 家は樺太領有末期の 1938 年に西海岸の恵須取町に移住した。恵須取は 1924 年に樺太製紙株式会社のパルプ工場、のちに島内最大級の産出量となる太平炭鉱が 1925 年に操業開始して以降急激に人口が増加し 1941 年には 39,026 人と豊原（37,160 人）を越える樺太最大の都市となった。恵須取のある西海岸は、真岡を中心とした鉄道も届かず、1930 年に西海岸縦断道路ができて初めて船舶以外の交通手段が成立した（原・天野 2017：25）。

日本とソ連は 1941 年 4 月以降に中立条約を結んでいたが、1945 年 2 月に米英ソによるヤルタ会談で交わされた密約によってドイツ敗戦後にソ連が対日戦争に参加、千島列島が引き渡され、樺太が返還されることが約束されていた。1945 年になると徐々に樺太にも戦火が及び、2 月頃から宗谷海峡で米海軍の潜水艦からの攻撃によって被害が

に分け、募移農夫には家屋・小屋掛け料・農具・家具、3 年間分の米と塩噌料、一反歩につき 10 両の開発料が与えられた。しかし、移民の定着率はよくなかった。その後、土族授産のため 1874 年「屯田兵例則」が定められた（関他 2006：57-66）。

出始めた。同年、国境付近ではソ連軍が戦備を増強し始めた。モスクワ時間 8 月 8 日午後 5 時にソ連の外相が日本への宣戦布告の声明を読み上げ、1 時間後にソ連極東軍が満洲国境を越え日本軍に対して攻撃を開始した。樺太においては、8 月 9 日朝に国境警備隊めがけて迫撃砲が発射され、ソ連軍の侵攻が始まった。樺太に駐屯した第 88 師団とソ連軍の兵力の差は圧倒的だった⁴（原・天野 2017：291-311）。

豊原の樺太庁では 8 月 10 日に緊急部課長会議を開催、住民の緊急疎開を決定した。13 歳以下の子ども、14 歳以上の女性、高齢者、病人など 16 万人の住民を 15 日間で疎開させる予定だった。大泊、真岡、本斗が送出地となり 13 日に第 1 陣となる宗谷丸が大泊港から出港した。8 月 25 日にソ連軍が宗谷海峡を封鎖するまでに人口の 2 割に当たる 7 万 6,616 人、その 9 割程度が稚内に上陸した。

北緯 50 度線上の国境を突破して、最北の古屯、安別を制圧したソ連軍は、11 日から恵須取へ空襲を開始して、13 日には中心街は焼け野原となった。16 日にはソ連兵が恵須取に上陸した。恵須取には特設警備 303 中隊などが警備についていたが、住民を避難させ 16 日に撤退した。しかし、国民義勇隊にはその連絡が徹底せず、上陸した 1,500 人のソ連兵と交戦、民間人や看護師、防空監視隊で働いていた女性などが犠牲になった。

緊急疎開と密航脱出した約 10 万人を引いた 30 万人が南樺太に残留した。その後、1949 年 7 月までに 26 万 3,875 人が帰国し、朝鮮人と結婚した日本人女性は日ソ共同宣言（1956 年）後の 1957～59 年に帰国、朝鮮人の帰国は韓ソ国交後の 1990 年代に実現する（富田 2016：201）。

3. 2 A 家概要

本論で調査対象とする A 家当主は、1915 年生まれの紳士服職人であった。彼の父親は 1874 年生まれて 22 歳の時（1896 年）に石川県から北海道近文町に移住し⁵、貧しい暮らしの中で 2 男 4 女を儲けた。その第 5 子、長男として成長した A 家当主は 1937 年（22 歳）に同い年の妻と結婚、翌年恵須取に移住し、洋服屋を開いた。1944 年 5 月（29 歳）から 9 月まで歩兵第 125 連隊第 11 中隊⁶に教育召集され、妻と父に店と 3 人

⁴ 歩兵中隊は日本軍 10 個／ソ連軍 37 個（以下同様）、大砲・迫撃砲は 28 門／282 門、重機関銃 42 丁／182 丁、軽機関銃 94 丁／454 丁、戦車 0 台／95 台、飛行機 0 機／100 機であった（原・天野 2017：295）。

⁵ 北海道移住者送出地域には、年代ごとに移り変わりがある。1894～98 年は、石川 8,695 戸、富山 7,351 戸、新潟 6,756 戸、青森 5,988 戸、福井 5,629 戸であり、A 家当主の父親の北海道移住は北陸からの移住ブームが起きていた時期と一致することが分かる（関他 2006：112）。

⁶ 1940 年札幌で編成され満洲から帰還した第 7 師団歩兵第 25 連隊が樺太上敷香へ移駐し、補充隊を加えて編成された。1943 年に敷香町気屯へ移駐し国境方面警備にあたる。

の子どもを任せて気屯に駐屯していた部隊に入隊した。1945 年 8 月 3 日に再度召集され、8 月 12 日に解除、即日充員召集され 15 日に解除された。

1945 年 8 月 9 日にソ連が日ソ中立条約を破棄し樺太に侵入、占拠したため、妻は 6 歳 3 か月、3 歳 8 か月、1 歳 11 か月の 3 人の子どもを連れ、父（妻にとって舅）と一緒に恵須取から徒歩で内路村へ移動、そこから汽車で大泊町に行き、船で稚内へと引揚げてきた。当主は、1946 年 2 月に北海道に帰国した。その後、更に 3 人の子どもを儲けて札幌市で洋服屋を開いた。

当主と妻はいずれも故人であるが、子ども時代から樺太への移住、引揚げ、その後の北海道での暮らしについて語った録音データを残している⁷。また、6 人の子ども達が存命であり、樺太時代の自身の体験や両親から聞いた体験についての記憶を有しているため、彼らに対してインタ

ビュー調査を行った。これらのデータを分析して、20 世紀の北海道と樺太の間を移動した日本人移住者の生活についての一事例を明らかにする。また、当時の恵須取における生活について、各資料館や図書館（稚内市樺太記念館、稚内市立図書館、北海道大学）に保存されている資料を閲覧して、補足データとした。

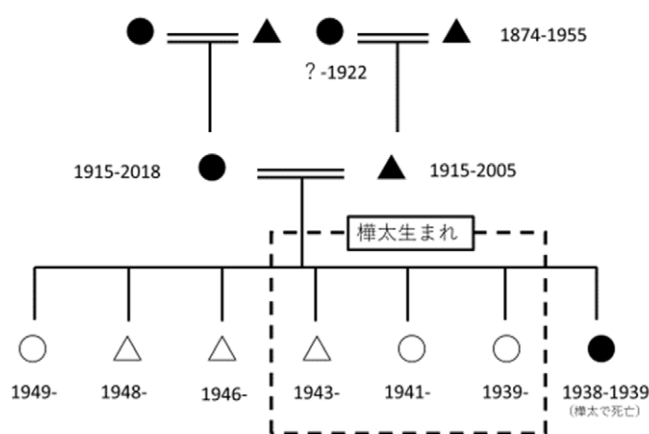


図 3. A 家家系図

4. A 家の樺太移住と引揚

本章では、A 家当主夫婦の残した録音テープの内容から二人の生まれ育ち、樺太移住の流れ、引揚げについて述べる。可能な限り、その他の資料にて確認、補足したが、基本的には二人の記憶に基づいているため一部事実と異なる可能性があることを指摘しておく。また、個人名や店名は仮名である。

4. 1 樺太での生活

4. 1. 1 樺太移住の流れ

A 家当主の父は、石川県出身で 1896 年 22 歳の時に北海道に渡った。石川県にいた

⁷ 1985 年 8 月 25 日から 9 月にかけて A 家当主の三男がインタビュー、録音したものである。A 家当主夫婦は当時 70 歳である。

ときはゴザ屋を営んでいたが食い詰めて「北海道に行ったら何とかなるだろう」と議員が募った開拓団に参加して北海道に移住した。A 家当主は、北海道近文町で 1915 年に 2 男 4 女の第 5 子として生まれた。長男、長女は幼いころに没しており待望の男子として大事に育てられた。しかし、貧しい農家であったため、高等小学校卒業後には紳士服の洋服店に弟子入りすることとなった。本人は、師範学校に進学し、教師になることを希望していたが、父親が人に金を借りてまで学校に行かなくてもよい、手に職を付けた方がよいという考えだったからである。

A 家当主は、手先が器用で賢かったため、紳士服職人としてめきめきと腕を上げ、21 歳の時に独立した。父親は、病院で小間使いをしていたが仕事をやめて、A 家当主が借りた一軒家で一緒に暮らし始めた。仕事は順調に増えて、弟子や職人を抱えるまでになったが父親に家事をしてもらっていたので、22 歳になり結婚することになった。

当主妻は、北海道の瀬棚町出身で雑穀屋の娘だった。父方は、松前藩の藩士の家系であると言われ、本家は瀬棚の網元であった。妻は、4 男 4 女の 4 番目の子どもであった。母が小学 3 年生の時に亡くなり、家業が傾き、自分の身の回りのことから家事までやることになった。高等小学校 1 年の途中で学校を辞めざるを得なくなり、和裁を習わせてもらえるということで本家に住み込みで手伝いにいった。本家は漁師相手の雑貨屋も営んでおり、妻は朝暗いうちから店番をした。当時は、醤油は醤油瓶に何合というように購入するため、店番には苦勞した。さらに掛け売りだったため、ランプの下でそろばんをはじいて帳面に記録した。その後、家事見習い、和裁を覚えたが礼儀作法をさらに覚えるため親戚の紹介で旭川市の砂糖問屋で働くことになった。

1937 年 2 月に二人は結婚し、翌 1938 年 2 月に第一子となる長女が生まれた。同年 11 月に樺太に移住した。「樺太は景気がいいから、金もうけできるとこだから行け」と周囲から言われていた。当主は、師匠から「樺太行ったら品物少し送ってやるから樺太でちゃんと商売しろ」と言われていたが、誰も知らないところで商売することは難しいと思い、1 回恵須取に行き様子を見てくることにした。恵須取の横田洋服店に行き職人として雇ってもらうように頼むと、忙しくて人手が足りずに困っていたため歓迎された。当時の樺太は仕事の単価もよく給料がよかった。

一端旭川に帰り、家族と相談して樺太に移住することに決めた。父親にそのことを告げると「おまえのことが心配になりおみくじを引いたら非常にいいおみくじがでた。どこにでもついて行く」と言われた。当面は横田洋服店で働き、知り合いが増えてから独立するつもりだった。

1939 年 1 月に長女が急性肺炎で亡くなり、4 月に次女が生まれた。長女の墓は現在でも樺太にあり、当主は引揚げるときにお参りに行ったが、掘り返して骨を回収しようにも掘る道具もなく涙をのんで置いてきた。

洋服屋の客は順調に増えて 1939 年 2 月に独立して店を構えた。その後、徐々に織物

の統制が始まり、繊維組合に入り株をもつことになった。それにより生地が配給されるようになった。1941年11月には三女も生まれ商売も順調で樺太での生活が安定したものになった。その後、この店は1943年9月の企業整備により洋服裁縫共同工場に再編されるまで続いた。1943年9月には長男が生まれた。

そうこうするうちに、北海道の留萌町にいた姉が結核で亡くなり看病をしていた妹も結核に罹患していることが分かった。父が看病するために旭川へ戻り、二人の生活費や治療費を送るため家計は苦しくなった。その後、結核菌が検出されなくなり、父と妹を樺太に呼んだ。1943年の春に妹の容態が安定し、気候がいいので一端旭川に帰ることにしたが、小樽行きの船の上で妹は体調を崩してしまいそのまま旭川の国立の結核療養所に入院することになった。再度、父が妹の面倒をみるために北海道に渡り、1944年6月に妹は亡くなった。このように、当時の人々は事情に合わせて北海道と樺太を往来していた。

4. 1. 2 A 家当主の入隊

1944年の6月に当主に召集令状がきた。徴兵検査の結果は丙種だったが、90日間の教育召集に召集された。当主は自分が不在の間は、洋服の注文が入ったら近所の洋服屋に寸法をはかってもらい、組合に持っていき縫ってもらうように、妻に指示した。生地の配給があるかもしれないし、銀行に資金もあるから数年は当主が不在でも食べていけると教えた。

実際に、洋服の仕立ての依頼は多くあり、また、慢性的な生地不足により直しの依頼がたくさんあった。妻は和裁の技術があり、当主から直しの技術を教えてもらっており「なんぼでも仕事に来るんだわ、直してくれって」という状況で仕事には困らなかった。妻は、当主が生きて帰って来たときに店を畳んでいたら申し訳ないから、なんとかでも商売を続けなければいけないと思い一生懸命働いた。父が子どもの面倒をみてくれて家事も手伝ってくれたため大変助かった。

当主は入隊後に受けた適性検査ではよい成績を納め、縫工に配属された。当主は在郷軍人会に入っていたため軍隊について色々な知識があり、縫工兵になると教育召集が終わっても部隊に残されることがあると知っていた。そのため、人事曹長に「体も弱そうだし、縫工兵に入れ」と言われたが、「自分は体が弱いと思ってきた。一般の兵隊と同じように鍛えて、どの程度に通用するか鍛えようと思ってきた。滅私奉公の精神は十二分に持っています」と主張して2等兵として訓練に参加することになった。

当主は成績が良く、てき弾筒軍隊に配属になった。その訓練中に家の近所に住んでいた上藤さんの息子が現役兵で入隊していることが分かった。その人は別の中隊の上等兵として模範兵だったため、何か不自由なことがあったら連絡するように言ってくれた。周りの古参兵も彼の同郷の人、ということで当主を見る目が変わった。こういった個人

的なつながりが当時の軍隊の中では有効に働く場面があった。

当主と同じ新兵で学科試験を受けた人の中に、中等教育を受けた人が3人いて、他に巡査部長、官庁の職員などがいた。その中で当主は2番か3番の成績をとり、下士官室担当として事務作業をするように命令された。当主は中等学校に行っていないが、成績が良く、商売をしていたので腰が低く人当たりがよく重宝された。

下士官室では、初年兵教育のための教本や参考書の写し、試験問題の作成などを行った。そのため、兵隊自身の身の回りの仕事である使役という役割を免除される、ビンタをされない、演習で鉄砲を担がなくてよいなど特別扱いを受けていた。新兵の仲間にはうらやましがられたが、下士官室でタバコを吸わせてあげたり、軍服の繕い物を手縫いでやってあげたりしたので仲間からも頼りにされた。

除隊の1カ月前には、上官に呼ばれて帰れると知らされた。成績が悪い人や失敗した人は転属を命じられることもあった。兵器を傷つけたり、上官の悪口を言ったり生意気だということが上官の耳に入ると転属させられた。当主は帰る前の晩などは「とっても寝れなかったさ、うれしくてな」という状態だったが、一方で「俺は転属だ。札幌の連隊だ」「上敷香の部隊まで転属だ」という人もいて複雑な思いだった。皆帰りたけれど自由に帰れないし、どこでも転属させられるのが軍隊だった。

4. 1. 3 除隊後の職業と再召集

1944年9月に当主は除隊になったが、いくら貯金があるとはいえ、再度召集されると家族が困るからと周囲の人々が心配して職場を紹介してくれた。経済警察の繊維担当、警察官、農業会の主事、真岡町近くの蘭泊村の助役、本斗町にある国策の造船所の会計課長などに誘いがあった。しかし、子どもが3人いるし、父もいるため恵須取から簡単に引越してできないと思い、ちょうど職員に空きがでた恵須取配給統制組合に勤めることになった。近所に米の配給所があり、元米屋の主人が配給統制組合の理事長をやっていたため誘ってくれた。これが1945年4月のことだった。

配給統制組合は、恵須取の商業組合、警察、役場の協議で運営しており、薬や金物以外の物資すべてを扱った。たとえば、今月何日に酒を1人当たりいくらか配給する、となったら当主が酒を受け取り、配給所に送り届けるといった仕事内容だった。

いつ再度召集されるか分からないため、今の内に家族には北海道に引揚げるように相談していたが、父が「旭川なんか、生活苦しくて行かれん」「恵須取にいる。こんないいところない」と言い張った。北海道に帰らないなら、畑付きの家を買おうと考え、3反の畑、家と鳥小屋がついて沢の水を引きやすい物件をみつけて手付金を支払おうとしていたところに2度目の召集令状がきた。それが、1945年8月2日のことであった。

2度目は、10日間の臨時召集であった。再度2等兵として入隊だったが、高年兵ということで雑用などはやらずにすんだ。今度は縫工をすることにして、自分のミシンを部

隊に運び演習にでなくてすんだ。8月10日に召集解除ということで、地元から4斗樽が何本か届けられて酒を飲んで盆踊りをして大騒ぎした⁸。ところが、8月8日にソ連が日本へ宣戦布告し、8月10日には総攻撃が始まる。そのため、10日には「即日、充員召集を命ずる」ということになった。

このようにソ連が侵攻してきたときに当主は召集中だったため、家族とは別に引揚げることになった。

4. 2 樺太からの引揚

恵須取には、鉄道が開通していなかったため、避難ルートは2つあった(図4参照)。第一のルートは、樺太山脈を越えて東海岸の内路までの内恵道路約90キロ、第二のルートは西海岸沿いを南下し、100キロ先の九春内までの珍恵道路約100キロを行くものであった(天野 2015: 147-148)。妻たちはソ連軍の侵攻から逃れつつ1945年8月に第1のルートをたどり、A家当主はそのあとを追いかけて1回目は第1のルート、2回目以降は第2のルートをたどった。

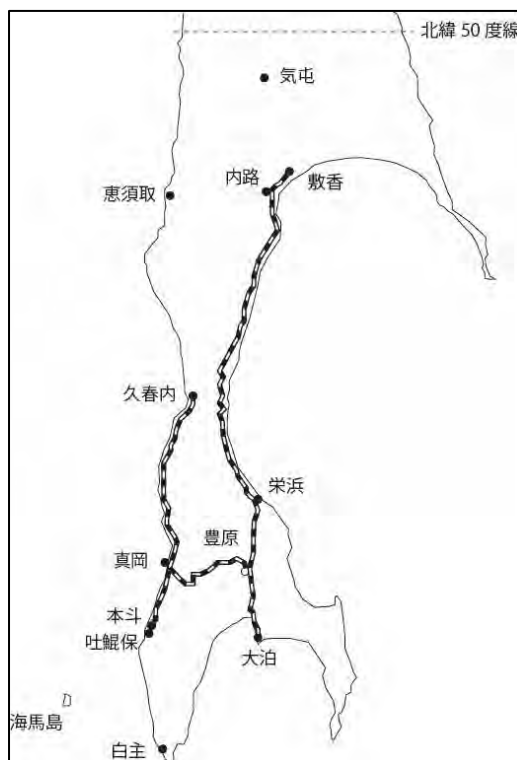
4. 2. 1 妻たちの引揚

1945年8月の始め、妻はもうすぐ2歳になる長男のために夏布団を新しく作っていた。布団屋から生地を分けてもらい、布団を縫い、綿を入れていた。近所にすむ女性のご飯を作り持ってきてくれて、一緒にお茶を飲んでいたら外がパーッと光った。「こんな近くにB29でないか」と外に出てみると、ソ連から大きな飛行機が偵察に飛んできた。急いで貴重品袋を提げて家の裏に掘ってあった大きな防空壕に逃げ込んだ。樺太では真夏の8月でも防空壕の中(地面)は凍っており寒さで歯ががたがたした。そのため防空壕は冷蔵庫代わりになり、魚などを凍らせて保存できた。

防空壕の中に入っていたら「バーンッ」という音がした。近所の鉄工所に爆弾が落とされて、その反動で防空壕の蓋が持ち上がった音だった。あまりの音に恐ろしくなり、防空壕の中には居られないと思い、必要なものを探して冬のオーバーを着て子どもにモンペをはかせて一旦は山の上に逃げた。しかし、その山の上には無線施設があったため敵が来るかもしれないと思い、さらに艦砲射撃を受けたため下山した。山裾に小屋が建ててあり、周囲のツンドラは湧き水が豊富であり、その水を汲んで木の下に隠れて炊事して、敵機がきたら小屋の中に隠れて過ごしていた。そうして家から大事なものを運び

⁸ 2度目の召集の日付については、テープ(記憶)、記録において日付のずれがある。引揚者給付金請求書の添付資料には、8月3日応召、12日解除・充員応召、15日解除とある。特別交付金請求書の添付資料には、8月3日応召、10日解除・充員応召、17日解除とある。

父が袋に入れた米を背負いその上に 3 歳の三女を肩車して歩いた。父は当時 72 歳で妻は気の毒になり、娘たちに歩くように言った。妻は二女の手を引き、長男を背負って歩いた。子どもたちに「北海道行ったら、瀬棚へ行ったら、おいしもいっぱい食べさせてやるから歩きなさい」といって歩いた。



妻たちは内路を目指して歩き続けて疲れて暗くなったら寝ていたが、夜間にはソ連が照明弾で照らしてきて恐ろしくて寝ていられなかった。避難した人々が捨てていった物やかつての住民がおいて行った食料などを役立てながら歩き続けた。避難している人たちは「みんなその当時、親戚みたいなもん」で大きな川で鍋を持っている人が順番に鍋を貸してくれて、お米を炊いた。川の真ん中でお米を洗い、川辺でおしめや着物を洗濯した。ご飯が炊けたらおにぎりを作り、また歩いた。

昼間に敵機がきた時は芋畑などに隠れた。「敵機襲来っ」と誰かが言うと、子どもたちも心得ていて耳をふさいで畑に四つん這いになり隠れた。その上を飛行機が「ドビャドビャッ」と爆弾を落としていった。

– 197 –



写真 2. 稚泊航路記念碑と稚内港北防波堤ドーム（2023.6.17 撮影）

艦に撃沈された引揚げ船に乗っていて犠牲になった⁹。稚内では駅に着くと婦人会の人たちがお茶やおにぎりをくれた。

この辺りの日付について、特別交付金請求者（引揚者）の添付資料によれば、1945年8月16日恵須取町より上恵須取に強制移動、21日に東海岸内路町を経て大泊に集結、23日日本海軍の艦船にて稚内に上陸とある。

その後、妻の実家の瀬棚に汽車で向かった。父は、旭川にいる娘（当主の姉）のところに行き、妻と子どもたちは1945年8月末

から翌年2月まで当主の帰りを瀬棚で待ち続けた。

4. 2. 2 A 家当主の引揚

当主が8月10日付きで充員召集に応じていると、ソ連の飛行機が飛んでくる、艦砲射撃もあり、お盆になりソ連兵が上陸してきて状況はますます悪くなってきた。8月16日には、「なんか戦争が終わったらしいな」という話が回ってきた。部隊長は前日から知っていただろうと思うが、当主たちは山の中の守備についていたため連絡が取れなかった。住民が続々と避難していく中、当主たちの部隊は山の中の沼のそばに集められた。上官が「これからおまえたちに大切な話をする」と言い出したため、日本の戦争が終わったことが分かった。隊長はソ連に交渉にいくが、分隊毎に武装解除するから兵器を分解して沼の中に捨てるように言われた。階級章を全部とり、軍隊手帳を裂いて、一人一人火をつけて燃やした。当主は、「ほっとした。もう、すぐ子どものところへ行こう」と思った。当主たちの隊は軍服を捨てて、一般人になって故郷に帰るように言われたが、他の部隊の中にはソ連軍の捕虜となってシベリアに連れていかれた人も大勢いた¹⁰。

当主たちは、数人で連れだって、家族を探しながら内路までの道のりを歩いて行った。子どもと年寄りを連れているから早く歩けるわけではないし、追いつくのではないかと炊事の煙が上がっているところを一つ一つ確認しながら進んだ。内路までたどり着いたが

⁹ 三船殉難事件のこと。1945年8月22日、北海道留萌沖の海上で樺太からの疎開者を乗せた緊急疎開船3艘（小笠原丸、第二号新興丸、泰東丸）がソ連の潜水艦（当時は不明）から攻撃され、小笠原丸、泰東丸が沈没、1,708名が犠牲になった（北海道新聞社1988）。

¹⁰ 厚生労働省の発表によればシベリア抑留者の総数は、57万5,000人、そのうち約6万人が死亡したとされている（麻田2024:243）。

数日前には大泊行の汽車がソ連に止められており、僅差で間に合わなかった。当主たちは、ソ連兵につかまり捕虜になりかけたが、背が小さい日本人にこんな小さな兵隊はいない、と言い逃れた。ソ連兵に学校に集められ家に帰って働くように言われたため、再度恵須取に戻るようになった。

避難途中の住民も戻って暮らし始めていた。当主は、以前からの知り合いであった豊田さんが本斗におり、来るように言ってくれたので本斗に移動した。豊田さんは漁業会の親方であり、船が手に入りやすかったため、親しくしていた仲間たちも集まり北海道への密航を計画していた。10月には、本斗の南にある白土から出航する船に同乗させてもらう話があり、1日ばかりで歩いて行った。たどり着いてみると船は出航しないということがわかり本斗に戻った。11月初めには、本斗の北隣にある漁港から船がでるときいて、その日にでかけていった。うまく船に乗り込んだが、燃料が潤滑油であり、エンジンがうまくかからず、そうこうしているうちに海がしけてきた。これはもう駄目だということになり、みんなで海に飛び込んだ。うまく進まない船の上でぼやぼやしていたらソ連兵に捕まり殺されてしまうため逃げた。当時日本人は夜8時から朝5時まで外出禁止で見つかれば撃たれてしまうため、浜の漁師の家で事情を話して着るものを乾かしてもらい、明け方によろやく家に帰った。こういった密航は、金や食料と引き換えに依頼した¹¹。

このように密航計画を立てては頓挫してを繰り返して、9回目で成功することになった。年が明けて1946年2月26日の朝、夜中の1時頃に本斗の南の吐鯉保の沢から船に乗った。豊田さんは、「死んでもともとだと思よりしょうがねえじゃねえか。子どものことを考えたら、こんなところで生きておれるか」と言った。当主は「俺の命は豊田さんに預けるから」と頼んだ。エンジンの付いた船は沖に出してあるため、まずは磯船に乗り漕いでそこまでいった。2時間近く磯船を漕いで本船に乗り換えた。本船までの移動に使った磯船を乗り捨てるとソ連軍に見つかるので、本船の船尾につけて引っ張っていった。

夜明けになるころには、宗谷海峡に位置する海馬島もみえるし、かすかに利尻島が見えてきた。「こっちは稚内だ。こっちは利尻だ。これでもう良かったな」「とにかくもう早く稚内に着かないか」と思っていた。ところが、樺太と稚内の中間ぐらいに来た時に、海がしけてきて、吹雪も始まった。船は波をかぶって、エンジンが止まってしまった。乗組員23人のほとんどは船乗りだったため落ち着いて水を出したり、エンジンを修理していたりした。

¹¹ 漁船を準備、密航を斡旋する業者もあり、ボートからランチ（小型の機動艇）まで20円、ランチから北海道まで1000円程度だったという。1945年8月末から46年末までに約2万4000人が密航脱出した（富田2016：184）。

当主たちは、「稚内を目の前にしてもう駄目かもしれない」と思い、イルカが辺りをびゅんびゅん泳いでいくのを見て「俺もイルカだったら良かったんだがな」と思ったりしていた。幸いにもエンジンが再始動して船が走り出した。右手の方に船が見えて、吹雪はひどくなり、風が強く、波も高いため「もうソビエトの船でもいいわ」と船主が言っ、助けてもらおうということになった。

ところがその船の「胴っばらに日の丸ついてた」ため、助かったと思ひ懼にむしろを縛り付けて合図した。船長がその船に乗り込み、米を12俵積んでおりその半分を渡すから助けてくれるよう頼んだ。その船は稚内の漁船で漁の最中であり、当主たちを乗せて稚内に帰るから乗り移るようということになった。船同士をくっつけると波がきたときに相互にぶつかり大破してしまうため、波がきて近くなった時に飛び移ることになった。漁師たちは上手に飛び乗ったが、当主たちは素人でオーバーなどを着ているから難しそうだった。当主は「俺、渡れるかな」と不安に思ったが、「これ渡らなきゃ駄目なんだ。ここまで来たら、どうしても家族に会わなきゃいけないと思って、もうそれこそ神念じだ」という気持ちで飛び移った。

みんな無事に乗り込み、船倉に移動して、船員がむしろを敷いて休んでくれと言った。当主たちは、出発以来はじめて空腹感を覚えて、用意してきた握り飯を出して食べた。食後には眠くなり、寝入ってしまい、次に「おい、着いたぞ」と声をかけられて目が覚めると稚内だった。

当主たちは上陸して一晩稚内の旅館に泊まり、それから姉のいる旭川に移動するために、引揚者用の手続きをする事務所へいった。引揚証明書と無料乗車券をもらってそれぞれの故郷に帰ることにした。旭川では知り合いの上田さんをまず訪ねたら「あら、Aさん、足ついているのか」「いや、足付いてる。昨日、俺、密航で稚内に着いたんだ。まず、上田さんの顔を見て、それから姉のところへ行こうと思うんだ」と説明した。すると、まず家に上がって、「これから何もねえもんが生きていくのに、ひげ生やしてたら似合わんから、ひげ落とせ」と言われた。ひげをそると「ああ、昔のAさんの顔になった」「良かった良かった」と酒やご馳走を出してくれた。その後、姉のところに行き、次の日に家族が待つ瀬棚行きの汽車に乗った。

不思議なことに、次女はその日父親が帰ってくる夢を見て「もう今日は父さんが帰るから、寝ない」といって起きていた。すると、その通りに当主が瀬棚に夜遅く終電で帰ってきた。当主は家族が元気で瀬棚にいることは分かっていたが、とにかく顔を見なければと思って家までの道のりを急いだ。家にたどり着き家族と再会したときは「本当にあの時はうれしかった」という。

以上のように、A家の妻と子どもたちは8月末のソ連軍が南樺太を掌握するぎりぎりのところで脱出し、当主は兵士としてではなく一般人として樺太に残ったことにより脱出のチャンスを得られた。密航の試みは、9回目で成功するなど北海道に帰りたいとい

う執念と、たまたま日本の漁船が近くを通るという幸運に恵まれたことにより無事の帰郷がなかった。

4. 3 A家子孫による記憶と認識

本節では、A家当主の子どもたちの話をまとめる。次女、三女、長男は樺太生まれで引揚げ体験者であるため、その記憶について尋ねた。次男以下は、引揚げ後に北海道で生まれたため、主に両親から聞いた話や自分の考えなどについて尋ねた。なお、本節における親族呼称は、子どもたちからみたものになっている。

次女（1939年生まれ）

次女は、樺太についての記憶はやはり引揚げの時のものが鮮烈である。しかし、樺太の日常についてもいくつか記憶していることがあった。家の裏に海があり、誰かと一緒に遊んでいる時に氷が割れて海に落ちた。家には「A洋服店」という看板が掛けてあり、玄関に入るとすぐ仕事場で、2階で当主の出征祝いをしたこと、みんなで万歳をしていたことを覚えている。向かいに料亭があり、1944年の大火事で家の向こうが真っ赤になった。近所の質屋の娘と仲良くしており、引揚げ後に東京で再会した。叔母（当主の妹）がとてもかわいがってくれたのもよく覚えていて、結核に罹患していたため抱っこするときは顔を背けて対面しないように気を付けてくれた。

引揚げのときは、作ってもらったリュックを背負って長く続く山道を歩いた。歩いて歩いて飛行機が来ると高い草に隠れて、真夏の暑いときに長靴を履いて、防空頭巾をかぶって逃げた。夜に寝るときは草の上に寝かせてくれて、母と祖父が手で蚊を追い払ってくれた。丸太でできた橋を渡って川を渡った。ソ連の飛行機が飛んでくると、そんなわけではないが「父さんが乗っているんじゃないか」と思って見ていた。知り合いのおじさんが「よっちゃん、あとから父さんくるよ」「父さん今来るよ」と言われた。避難民の中に、「子どもがいない、子どもがいない」と叫んでいる女性がいた。一緒に探していたら避難が間に合わなかっただろうけど、その声が耳に残っている。母はよく「おじいちゃんがいたから逃げてこれた」と言っていた。

引揚げ船は甲板が汚くて、ゴザでも敷いていたのではないと思う。稚内から瀬棚までの汽車に乗っている時には煙で顔が煤けた。瀬棚の母の実家に身を寄せている時は、しよっちゅう駅に父を迎えに行っていた。ある時、「父さんが帰ってくるって」と夢をみたら本当に帰ってきてとてもうれしかったがいざ再会するとなったら今度は恥ずかしくて布団をかぶっていた。瀬棚に滞在中、小学1年生だったが、教科書がなく、母方の叔母が手書きの教科書を作ってくれた。本文を同じように書いて、絵も描いて綴じて作ってくれた。

その後、旭川に行き引揚者用の住宅に入居した。1軒の家を2世帯に割り当てられた。

祖父は、厳しい人でストーブの前に座り、引き戸を少しでも開けておくと「あけたらしめれ！」と怒られたが、病気をすると飴をくれた。弟（長男）が小学校の修学旅行に行っている間に亡くなり、帰ってきたのが葬式の日だった。お土産として祖父に飴玉を買ってきて「おじいちゃんに渡したくて買ってきた」と言った。貧しい生活をしていて父が「おやじを青畳の上に座らせたい」と言っていた。

その後、両親と樺太のことはあまり話していない気がする。話したかもしれないが、子どもだったからよく覚えていない。

三女（1941 年生まれ）

三女は 3 歳 8 カ月だったため樺太のことは引揚げのときのことを断片的に記憶している程度である。夜にソ連軍が撃つ焼夷弾がとても明るかった。避難中に、祖父が崖を下りて川の水を缶に汲んできた。

両親は思い出したら樺太の話を時々した。母の話では、逃げてくるときに筋子が沢山入った樽がおいてあった。ソ連の爆撃機がくると蜘蛛の子を散らすようにパーッと逃げた。その時、三女が祖父から離れて母のところに駆け出してきて、もうだめだと思ったと、母が言っていた。父は、恵須取から逃げる前に墓地に行つて「長女に別れを告げてきた、涙が出た」と言っていた。土葬だから骨も拾えないし、掘る道具もなかった。軍隊にいたときに新兵は一行に並べられてビンタされた。また、父は捕まっていたときに「ロシア人女性と結婚してこのままここにいろ」と言われた。父は軍隊にいたときの癖で早食いであり、よく母に「ゆっくり食べて」と言われていた。

三女は、飛行機の音が怖くて、瀬棚や旭川に行ってもしばらくは飛行機が飛んでくると家の中に逃げ込んでいた。母が「もう怖くないよ」と言ってくれた。三女は「孤児にしないで連れて帰ってくれた母さんに感謝している」と言う。

長男（1943 年生まれ）

長男は、樺太時代のことは記憶になく、旭川にあった引揚者用住宅に住んでいたころのこと以降を覚えている。父は、教育熱心で中学校の時に PTA 会長、役員などをしていった。長男にずっと家庭教師を付けてくれた。樺太は林業、石炭が豊かで一次産業の地域だった。もともと祖父が北海道で一旗あげようと北陸から開拓のため来た。

両親は樺太にいた頃が一番幸せだったと言っていた。ロシア人のお客にも親切にしてもらい幸せだった。父は 21 歳で独立してその後ずっと自分で商売をして、1 回も雇用されていない。毎週呉服屋が売りに来るほど儲かっていた。商売が悪くなるとその呉服を質入れしていた。母が泣き言を言っているのを聞いたことがない。母が晩年肌身離さず持っていたメモには次のように記してあった。「泣くは人生、笑うは修行、勝つは根性、『心の中で泣いても顔では笑顔』私の苦しい時の体験」。長男は母の思い出として大

事に保管している。

次男（1946 年生まれ）・三男（1948 年生まれ）

次男は 1946 年 4 月生まれのため、妊娠初期に胎内で樺太引揚げを体験したと言える。子どもの頃は飛行機を怖がっていたという。両親とは高校までと大人になってから一時同居していたが仕事で帰りが遅く樺太時代の話などは特にしなかった。

三男は戦後生まれであり、直接樺太での居住経験はない。三男がこのインタビューを録音したのは、たまたま実家で静養する期間があり時間があるため両親の樺太引揚げ体験を録音しようと思って頼んだ。2 週間くらいかかった。

録音している時に母が「目の見えない子がいて『おばさん助けて』と言われたけど、自分の子どももいるし、機銃掃射とかから逃げなきゃいけないから連れてこれなかった」と話した。それまでずっと人には打ち明けられなかったが、初めて話せてほっとした様子だった。三男は「両親にはそういった辛くて悲しい体験があり、話せないこともあったのさ」という。樺太についてのテレビが放映されていて父に「おやじ、樺太だよ、見る？」と聞いたこともあったが、「見なくていい」と言っていた。長兄（長男）の妻の父は南方に出征して帰って来たが、何度か戦地の様子について「どうだったの？」と尋ねたが何も話してくれなかった。戦場での記憶は簡単に口にできるものではないと感じる。

父は賢く、字も書ける、縫物ができるから上官に可愛がられてビンタをされずにすんでいた。父の幼少期に家には馬が一頭いたが、家が火事になり、馬がやけどして死んでしまいそこから没落、小作化した。当時の家は、戸はムシロで、冬には布団の上に雪が積もり、みそ汁は味噌無しの塩味だったという。先述したように師範学校に行くためにお金を出してくれるという話があったが祖父が「他人の世話にはならない」と断り、洋服職人に弟子入りした。その後、仲間内で「樺太、儲かるらしいぞ」という話もあり、樺太に渡った。父が入隊する前に、洋服の芯地を数年分仕入れて、その芯地を使い靴の代用となる地下足袋の型紙をおこしていった。父が不在の間、母がその足袋を沢山作り家計の足しにした。父は、洋服職人として腕は良かったが経理や資金繰りが上手ではなく、北海道に帰ってきてからは商売で苦労した。戦後は、既製品のスーツが大量に売られるようになり紳士服をオーダーメイドで仕立てる、という職人による商売が徐々に成り立たなくなる時代だった。息子、娘たちはその手伝いをして苦労したが、樺太時代は商売が一番順調でお金も貯まったという。

四女（1949 年生まれ）

四女は、末っ子であり、24 歳で結婚するまで両親と同居しており樺太時代の話両親からよくきいていた。樺太に行った動機としては「一旗あげたい」というものがあっ

た。ずっと長居する気はなかったのではないかと思うが、もう少し長くいようと思っていた。樺太は職人が少ないからとても重宝されて、ロシア人からも「ロシアにずっといろ」と言われたが、父は「いるつもりがないからロシア語も覚えなかった」と言っていた。

北海道では樺太引揚者は珍しくなく、特に差別されたりすることはなかった。本州のことを「内地」と言うが、北海道を「外地」とは言わなかった。満洲や南方のことも「外地」とは言わずに地名で読んでいた。母の実家の本家の娘は満洲に「出稼ぎ」に行っていたという。四女は主に旭川のあとに転居した札幌で育ったが、札幌では樺太から引揚げてきた人はあまりおらず友達とそういった話をしたことはなかった。中学生の頃に、主婦の友という雑誌に樺太体験エッセイの募集があり、父の樺太時代の知人の妻が投稿、掲載されたのを読んだ。また、父の樺太時代の知人もよく家に遊びに来ていた。それらは「樺太の絆」であり、四女はそういった人々と父の交流を目の当たりにして、また実際に話を聞いて他人事ではなく近く受け止めていた。たとえば、四女の夫は戦争について知識はあるが身近に戦争経験者がいないため、私のように身近ではないと感じている。四女は両親の話をきくことにより樺太時代を「疑似体験」して、体で感じている。

大人になってからはさらに樺太引揚体験について色々と考え、思うようになった。戦争に関する本が新聞などで紹介されるとメモをして本屋で探してなければ注文して取り寄せる。以前、新聞で樺太引揚者が書いた本を見付けて購入し、読んだが樺太での楽しい思い出が書いてあった。今は、沖縄戦の遺族の手紙集、北朝鮮からの脱出を手助けた人の本などをメモしている。戦争について「知っていることを伝えていくことが大切」であると感じている。

5. 考察

5. 1 樺太移住

まず、A家の樺太移住について移民研究で指摘されるプッシュ要因、プル要因にあたるものについて検討する。北海道移民、樺太移民については、本州における人口圧力といったプッシュ要因よりも、明治以降の政府による移住政策が最大の要因であるといえる。A家当主の父親は北陸から地域あげでの北海道移住を経験しており、その延長上に樺太への移住も位置付けられる。また、娘の看病のために北海道と樺太間を頻繁に移動しており国境内の移動と認識されていた。一方で、「樺太は景気がよい」というプル要因が樺太にはあった。特に1920年代以降はパルプ産業や炭鉱産業が盛んになり、人口も急増した。

当主による樺太移住は、先に移住した親族や近しい知人などとの関係性を頼りにするチェーン・マイグレーションではなく、一人で伝手のない恵須取に下見に行くところから始まる。恵須取を選んだ理由は特に言及されていなかったが、移住した1938年には

庁都である豊原を上回る人口があり太平炭鉱の存在により“景気のよい”恵須取を選んだのではないだろうか。当主は、飛び込みで現地の洋服屋に職人として雇ってもらう様に依頼し、自ら足がかりを作った。“手に職”という父の方針は移住先で働く上で有利に働いたといえる。軍隊生活においても洋服職人としての技術が身を助けることになる場面は多かった。移住後は、現地で築いた人間関係によって軍隊生活や避難生活、日本への密航などを成し遂げていく。新たな環境で生活を切り開いていく技術と才覚が当主にあったといえるだろう。

5. 2 子孫の記憶と認識

子孫たちは、引揚当時の年齢が異なるため、実際の樺太体験、その後の家庭環境、両親との関係性によって多様な記憶と認識を持っている。樺太における直接の記憶としては、最年長の次女でさえ 1939 年生まれであり、6 歳の時の引揚げ時の記憶に限られている。しかし、各自が両親との会話を通して樺太時代について多くの知見を持ち、それらは他者の記憶でありながら、子孫の中に息づいている。さらに四女の話にあるように、引揚げ後に樺太時代の戦友や知人との交流があり、樺太時代の生活の一部がその後の北海道において続いていたことも影響しているだろう。このような樺太引揚者同士の交流は個人単位だけではなく、1948 年には樺太引揚者の擁護厚生と相互扶助を目的として全国樺太連盟¹²が設立され、1953 年には北海道恵須取会¹³が結成されるなど樺太引揚者が組織化し多様な活動を行っている。

2025 年に戦後 80 年となり、戦争の実体験を記憶する人々は減り続けている。全国の平和資料館などで行われている戦争体験者による語り部事業は岐路に立たされており、実体験を持つ語り部によらない継承事業が各地で立ち上げられている。たとえば、広島市では 2012 年から被爆者から講話を引き継ぐ「伝承者」を養成しており（安斎 2016）、沖縄のひめゆり平和祈念資料館では 2015 年から元学徒隊の「証言員」に代わり、戦後世代の職員が「説明員」として講話活動を開始している（君塚 2017）。これらの事業では、体験者による講話映像ではなく、生身の人間が伝えることの意味や、非経験者が記

¹² 1949 年に社団法人として認可、樺太慰霊・支援、研究推進、関係資料の発掘・整備・伝承、公益事業などを行ってきた。道内に 11 支部、道外に 13 支部。2004 年に樺太関係資料館を北海道庁旧本庁舎赤れんが庁舎内に設立、2021 年 3 月に会員の高齢化や減少のため解散。会員数はピーク時に 6300 人。一般社団法人全国樺太連盟 HP 参照 (<https://kabaren.org/>、最終閲覧 2024.12.26)。

¹³ 北海道恵須取会は 1953 年結成、『沿海州の見える町―樺太恵須取町小史』（1988）『恵須取在住者名簿』（1988）『恵須取町明細図』（1988）『樺太恵須取写真帳』（1992）などを出版している。恵須取の他にも、蘭泊、大泊、真岡、豊原、敷香などの居住者が同郷会や同窓会を形成していた。

憶を「継承」することの重要性が意識されている。

本研究においては、三男が思い立って両親の樺太引揚げ体験を記録したことが、貴重な証言を保存することにつながった。筆者のような研究者ではなく、家族、親族成員についてよく知り、その家族史を知り、北海道・樺太という生活空間を熟知する息子に対して語るにより、豊かな語りが実現した。その記録が筆者による研究活動に繋がっている。体験者の記憶を記録することの重要性を改めて認識した。

それに加えて、戦後に生まれた四女が両親から聞いた樺太体験を契機として自ら戦争などについて学び続け、自身の家族などと語り合うことを通して「知っていることを伝えていくことが大切」と言っているように、今後は多様な形を通して戦争体験を継承していくことが重要なのではないだろうか。

6. おわりに

本論では、北海道から樺太に移住したある一家の移住、引揚げ体験の詳細を当主夫婦へのインタビューデータから明らかにしてきた。そこには、明治以降の北海道、北方四島、樺太まで及ぶ北部開拓のマクロな流れとそこに生きるミクロな人々の生活の営みが見えてきた。1905年に日本領土となり約40年間“日本”として日本人が生活した空間は、かつての“日本領土であった樺太で暮らした日本人”を生み出し、その人々は引揚げ後の生活においても“樺太の記憶や絆”を保っていた。その記憶や絆は、かつて樺太で暮らした人々からその子孫に受け継がれ、さらにより大きな社会的記憶として日本社会に受け継がれていくだろう。特に個人単位を超えた樺太各地の同郷会がどのような機能を果たしたのかについては今後もさらに追及していく必要があるだろう。

樺太に暮らした人々の帰国事業以外にも、1960年代以降、サハリン地域墓参実施（1965～2004年）、サハリン北海道人会設立（1990年）、北海道とサハリン州間の「友好・経済協力に関する提携」調印（1998年）などの交流を重ねている。これらの交流は、2020年以降の新型コロナウイルスの流行や、2022年2月以降のロシアによるウクライナ侵攻などの影響で中断されていたが、折しも2024年9月には5年ぶりにサハリン南部残留の日本人が札幌市に墓参した¹⁴。国境の形態や意味、越え難さは、その時々国際情勢によって変化するが、今後もそこに生活する人々の移動や交流は続いていくのではないだろうか。

¹⁴ NHK 北海道 NEWSWEB「サハリン南部（元の南樺太）残留の日本人など5年ぶり集団来日」参照（<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20240907/7000069696.html>、最終閲覧 2024.12.26）。

〔謝辞〕

本研究は、「公益財団法人 JFE21 世紀財団」の 2022 年度アジア歴史研究助成を受けたものです。記して感謝いたします。また、調査にご協力くださった A 家の方々にも深謝いたします。

参考文献

- 麻田雅文 2024『日ソ戦争—帝国日本最後の戦い』中公新書
- 天野尚樹 2015「解題 I 千島・樺太の国境・殖民・戦争」エレナ・サヴェーリエヴァ『日本領樺太・千島からソ連領サハリン州へ』成文社
- 安斎聡子 2016「他者の記憶を語る—広島市被爆体験伝承者養成事業とその『語り継ぎ』」『青山社会情報研究』8：27-45
- 君塚仁彦 2017「博物館における『対話』による記憶『継承』活動の意義—ひめゆり平和祈念資料館の取り組みを中心に—」『東京学芸紀要 総合教育科学系』68：89-99
- 塩出浩之 2015『越境者の政治史』名古屋大学出版会
- 関秀志、桑原真人、大庭幸生、高橋昭夫 2006『新版 北海道の歴史 下 近代・現代編』北海道新聞社
- 竹野学 2000「人口問題と植民地：1920・30 代の樺太を中心に」『経済学研究』50（3）：117-132
- 竹野学 2008「樺太」日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社
- 田端宏、桑原真人、船津功、関口明 2000『北海道の歴史』山川出版社
- 田村将人 2014「樺太アイヌの〈引揚げ〉」蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版
- 富田武 2016『シベリア抑留』中央公論新社
- 中山大將 2014『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成—周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』京都大学学術出版会
- 原暉之編 2011『日露戦争とサハリン島』北海道大学出版会
- 原暉之・天野尚樹編 2017『樺太四〇年の歴史—四〇万人の故郷—』一般社団法人全国樺太連盟
- 北海道恵須取会 1988『沿海州の見える町—樺太恵須取町小史—』
- 北海道新聞社編 1988『慟哭の海—樺太引き揚げ三船遭難の記録』北海道新聞社
- 三木理史 2006『国境の植民地・樺太』塙書房
- 三木理史 2012『移住型植民地樺太の形成』塙書房